

キリスト教的救済論について

——シンポジウムに寄せて——

山田 晶

今回の大会において、田島教授のされた発表について私のした質問が、シンポジウムの時問題となったことを後で書いた。あいにく所用のため欠席し残念であったが、多少の誤解もあるようなので、あの時私がした質問の趣旨を、この紙面をかりて申し上げたい。

私は教授の御発表そのものに対して、異議を唱えたわけではない。それは立派なものであり、私にもよく理解できたのである。ただ教授が「キリスト教的救済論」といわれたので、そのことについて、エックハルトの救済論は「キリスト教的」といわれうるかと問うたのである。それも「ない」と断言したわけではない。「いわれうるか」と問うたのである。エックハルトを専門に研究した者でない自分には、「ある」とか「ない」とか断言する資格はない。だから問うたのである。しかしあとで反省してみても、そのように問うためには、そもそも「キリスト教的救済論」とは何かということが、問う者と問われる者との間で共通の理解に到達していなければならないことに気がついた。その点私の質問は不備であったと思う。そこで今、私が「キリスト教的救済論」の名のもとに理解していることを申し上げたいと思う。私はその理解を、聖書とアウグスティヌス、及びトマスを通して得たのであるが、それとは別の理解もありうるであろう。

私の理解する「キリスト教的救済論」は三つの特徴を有すると思われる。

第1に、キリスト教においては、真の人間の救済はこの世ではえられず、天国においてのみ実現されるということである。この世は天国を目指す旅路であり、人間は旅人である。「顔と顔とを合わせて」神を見ることは、終末において実現されるのであり、それまで人間は、それを信じ希望することにおいて救われる。このことは個々の人間についても、人類全体についてもいわれる。ここからして、終末を究極目的とする歴史観が形成され、預言者やキリストの出現も、この歴史の中で、それぞれ独自の救済史の意味を帯び、それぞれの「時」が、かけがえのない意味を有することになる。

そこで私が教授に問うたのは、エックハルトにこのような意味での「時」の思想があるかということであった。

第2は、「他者」の有するキリスト教的意味である。人を愛せよというのは、すべての宗教の説く所であり、特にキリスト教に固有のことではない。しかしキリスト教にとって他者とは、覚者が下界においてきて済度すべき「衆生」ではない。互いに愛し合い、時には争い憎み合いながらも、相互に許し合い忍び合いながら、一緒に天国に向かって歩んでゆく「兄弟」なのである。だから一人一人が救われるとともに、諸共に救われるのであり、したがって天国は、「至福者の集い」(トマスのいわゆる《societas beatorum》)としてのみ現成するのである。そこで私が教授に問うたのは、エックハルトにこのような意味での「他者」の思想があるかということであった。

第3は、「無我」ということの有するキリスト教的意味である。パウロも「ケノーシス」ということをいう。しかしその意味は、一切の我執を捨てて全く無になるということではない。キリスト教の立場からいえば、そんなことは不可能である。すべての人間が罪人であり、罪から完全に清められることはできない。まさにこのようにすべての人間が罪の奴隷であるからこそ、神は人間の悲惨をあわれんで、その子を世にたかわし給うたのである。だからパウロにとってケノーシスとは、罪の奴隷である現実の自分の弱さをそのまま認めて、罪のままの自分の全体を、キリストのうちに投げ入れること、これがケノーシスである。あとはキリストに委せるのである。自分の力で「無となる」のではなく、キリストにおいて「無となる」のである。それゆえキリスト教におけるケノーシスは、罪の意識と不可分に結びついている。そこで私が教授に問うたのは、エックハルトに、このような意味での「罪の意識」があるかということであった。

はじめに申し上げたように、私はエックハルトの思想のうちに、これらの要素が「ない」と主張したのではなく、「あるか」と問うたのである。これまでエックハルトは、特に日本においては、禅やドイツ観念論の立場から評価され、キリスト教から出てそれを超えた深遠な思想家として賞賛された。しかしエックハルト自身はどのようなものであったか、それを明らかにするためには、彼の著作全体を、それが書かれ語られた歴史的状況の適確な把握のもとに考察する必要があると思われる。それによって、エックハルトの有するキリスト教的救済論の性格と、彼の思想の救済史の意味も理解されるのではないか。もっともこれは、エックハルトについて知らない者の漠然

とした期待であり、その本格的究明は専門の先生方をお願いしたい。